

# 定年前後世代には 積立シミュ

上村武雄

ノート・アドバイザーズ代表

# このような レーションを提案しよう

「定年前後世代だから安全に運用すべき」というステレオタイプの提案が、必ずしも適合性に即しているとは限らない。リスク・リターンを4つのパターンに分けて、シミュレーション結果を見ていこう。

## 投

資手法に関して鉄則と呼ばれるものは多々あるが、金融機関がお客様に積立投資を提案するうえでの鉄則は、長期投資、分散投資、複利運用、ドルコスト平均法の組み合わせだ。

20歳代や30歳代の若手・現役世代は、引退までの期間が長いので数十年という長期間の積立が可能である。手元にまとまった投資原資がなくても、毎月の収入から少しずつ長期投資することのできる資産形成が可能となる。

一方で、50歳代や60歳代の引退を控えた世代は、十分な収入が得られる期間が20歳代、30歳代と異なり短い。その結果、ちまたには次のような情報があふれている。

- ①運用期間が短いので、ボラティリティの小さい運用を
- ②投資元本を減らすことができないので、安全な運用を
- ③収入が減るので、分配金を

受け取りながら運用を間違っていないが、正しいともいえない。

確かに20歳代や30歳代と比べて運用期間は短い。とはいえ、安定したポートフォリオが必須かという点、必ずしもそうではない。大きなリターンも視野に入れリスクを取るか、大きなリターンを諦めリスクを抑えるかは、あくまでも適合性の原則に照らすべきだからだ。

お客様が目指すファイナンシャルゴールと、お客様の投資に関する知識、経験および資産の状況という適合性を把握し、意向や実績に適合した提案が必要である。

現在60歳のお客様が65歳引退まで、今後5年で積み立てるとしても、運用期間が5年とは限らない。5年積み立てた後、その資金を5年運用すれば運用期間は10年だ。

50歳代、60歳代だから投資

元本を減らすことができないという考えについても、同様のことがいえる。リスクを抑える提案をしただが、リスクを抑えるとリターンも抑えてしまう。この点を忘れてはならない。

## リスク・リターンは 幅広く考える

20歳代でも、100万円の投資元本が90万円になったら夜も眠れないならば、リスク10%に耐えられないお客様なのだ。同様に50歳代でも、1年間で元本が2割減っても耐えられるのであれば、リスク20%の運用に耐えられるお客様である。

このように、お客様に提案するリスク・リターンは幅広く考えるべきだ。

最後は、収入減に備えて分配金を受け取りながら運用するという考えだが、これも原則は避けるべきだ。運用にあ

## パターン1

- 期待リターン3%
- 想定リスク4%
- 当初元本なし
- 毎月10万円の積立て

たりキャピタルゲインとインカムゲインを組み合わせるが、基本は分配金は再投資すべきで、分配金を受け取るのは最後の最後である。

まずは、リスクを抑えた期待リターン3%（リスクは4%を想定）で10年間と20年間の運用を比較してみる。仮に複利で順調に運用できたとすると、10年間で1200万円投資して、10年後には資産が1394万円、利益は194万円になる計算だ。これを20年間続けると、2400万円投資して3268万円（利益868万円）になる。ポイントは期間を倍にする

## パターン2

- 期待リターン3%
- 想定リスク4%
- 当初元本300万円
- 毎月10万円の積立て

と、利益は194万円の倍の388万円ではなく868万円まで膨れ上がる点だ。少しでも長く運用することで、複利効果が大きく効いてくるため効果的である。

50歳代、60歳代ともなれば、多少なりとも蓄えがあるだろう。そこで、運用開始当初に一定額の貯蓄を投入するパターンを検討してみたい。条件はそのまま、当初300万円を投入し、その後10年間で1200万円を投資する。合計の投資額1500万円に対して、10年後に資産は1797万円、利益は297万円になる。これを20年間続

## パターン3

- 期待リターン5%
- 想定リスク10%
- 当初元本300万円
- 毎月10万円の積立て

当初に投入した300万円が大きく効いてくるので、20年後はパターン1より242万円もリターンが増加する計算だ。20歳代、30歳代では蓄えがなかったり、教育費などの支出があったりと検討が難しい初期投下資金も、50歳代、60歳代なら検討しやすく、大きなメリットを享受できる。

お客様によってファイナンシャルゴールは異なるため、パターン1やパターン2のリターンでは心もとないという